18.6.10 読売新聞

千葉　（第3種郵便物認可）

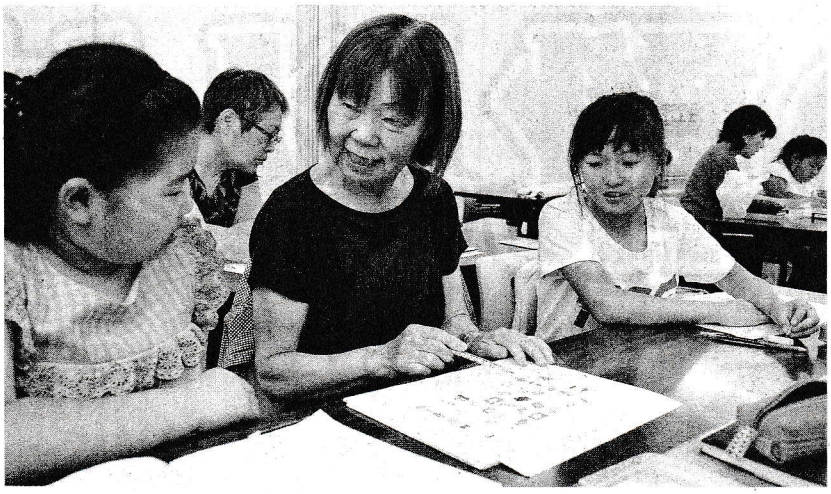
言葉の壁と不安 取り除く

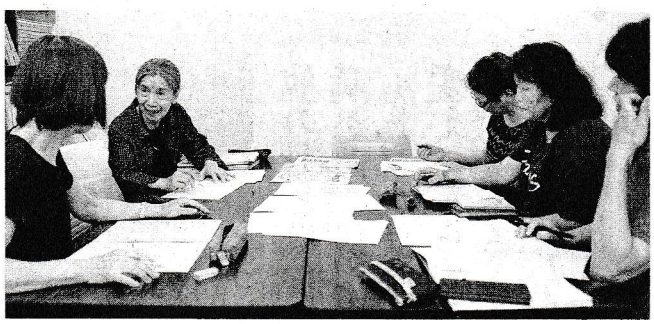
「外国人の子どものための勉強会」（松戸市）

ただいま活動中

今月5日の夕方、松戸市の新京成常盤平駅近くの建物の一室で、長机で子供たちの間に先生が座り、日本語の読み方を教えていた。「いっぴき」「ろっぴき」のように、小さい「つ」の後は「ぴ」になるんだよ――。先生のお手本を確認するように、中国人の女の子が「いっぴき、にひき」と読み上げた。

ここは外国人の親を持つなどして日本語が苦手な子供たちが通う教室。NPO法人「外国人の子どものための勉強会」が運営する。この日集まったのは、松戸市の小学2～5年生の6人。宿題の計算ドリルや食べ物の名前を覚えるかるた遊びをして、1時間半の授業を終えた。小学3年の彭潔（けつ）さん(8)は「先生が優しくて、毎回来るのが楽しみ。日本語が上手になった」と笑顔を見せる。





上 外国にルーツを持つ子供たちに日本語を教えるスタッフ（5日、松戸市で）下 勉強会の前にスタッフとミーティングをする海老名さん（左から2人目）

勉強会が始まったのは1996年。NPOの海老名みさ子理事長(75)は当時、東京都内で日本語を教えるボランティアをしていた。ある時、中国人の知人から、小学生の子供が、慣れない学校でストレスを感じ、円形脱毛症になったと聞かされ、「子供の不安を取り除きたい」と思ったのがきっかけだ。

非漢字圏の子供に漢字を教えることはより難しく、母国語の注釈が付いた漢字の参考書を活用するなどして、子供1～2人にスタッフが1人付く態勢で指導にあたる。海老名さんは「昇降口で靴と上履きを履き替えるなど、日本特有の習慣を知らない子もいる。学校に早くなじんでもらえるように、こうしたことも教えています」と話す。

週1回通って参加費は1学期3000円。勉強会以外にも、遠足やレクリエーションなど子供が楽しめる催しも企画している。

発足時は子供4人に日本語スタッフ3人でスタートした勉強会は現在、小学生20人と中学生28人が通うまでになった。スタッフも41人で、元教員や海外在住経験がある専業主婦などいずれもボランティアだ。これまでに25の国と地域の子供約1000人が学んだ。

「文化や言葉の壁を感じ、学校が嫌いだった子供が、日本語ができるようになり、スタッフに学校のことを楽しそうにしゃべっているのを見るのが何よりもうれしい」。海老名さんは、ペンを片手に日本語と格闘する子供たちの姿に、目を細めた。（大嶽潤平）

外国人児童増 通訳や補習も

県内では外国人の児童・生徒が増加しており、通訳の導入や日本語の補習を行って、言葉が通じない子供や保護者に対応している。

県によると、2017年12月時点で県内に住む外国人は14万3354人で、12年から約4万人増えた。小中学校の子供も12年5月の3178人から17年同月には4429人に増加した。

外国人が県内で4番目に多い松戸市には「学校への持ち物が分からない」「学校からの手紙を理解できない」など、子供や保護者が学校との意思疎通に苦労する事例が寄せられている。

同市は通訳に、生徒の授業の補助や、教師から保護者への手紙の翻訳などをしてもらっている。日本語指導員が週2回程度、子供に日本語を教える時間も設けている。

県は「外国人の子供には、粘り強く、日本語で日本語を教える指導を繰り返し、上達してもらうことが、学力向上や友人関係を作る上で大切」としている。